

仏像について 02

こんにちは、ナビゲーターの金子です。
昨日に引き続いて、仏像の疑問を説明、のお話です。

昨日の話では、仏教宇宙は大きく「仏界」と「六道」の2つに分けられる。
上位の「仏界」には、「如来」と「菩薩」がいて、下位の「六道」は、人間が死後に生まれ変わる6つの世界で天道、人道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道がある、でした。

この世界観、神様仏様の構図が分かると「仏像の見分け」ができます。繰り返しますが開祖の釈迦が本来望んだ世界観ではありません。

仏像は4つのグループに分けることができます。
1、如来 2、菩薩 3、明王 4、天部です。

明王（みょうおう）と天部（てんぶ）はちょっと特殊なので説明いたします。
明王は、密教（※）特有の尊像で「如来」の化身です。反仏教的な人々を強制的に従わせるために恐ろしい忿怒の表情をしています。

（※）密教とは仏教宗派の中のあるグループの呼び名で、仏教の秘密の教えとされます。
あの世ではなく生きて仏になることを説く、真言宗や天台宗などがあてはまります。

天部は、サンスクリット語で神という意味で、バラモン教やヒンズー教などの異教の神々が仏教に取り入れられたもので200種類以上あると言われます。天部を略して天とも呼びます。

もう少し分かりやすく説明します。

仏教の開祖の釈迦を神様に見立てて如来とした後、さまざまな解釈が加わって釈迦以外の如来（≡神様）が登場します。

如来の解釈がさらに広がって菩薩が生まれ、密教発生とともに明王が、インド土着の神様らが形をかえて天部となりました。

仏教のなかでは如来が一番の神様ですから、後で追加の明王や天部は如来の化身だったり、守護神と言われます。如来と自分には大きなギャップを感じ、自分に身近な神々を次々に創出していったというわけです。

もう少し詳しくみてみます。

如来には仏教の基本である「釈迦如来」、極楽浄土へと導く「阿弥陀如来」、病気を治癒させる「薬師如来」、密教における絶対的存在の「大日如来」がいます。

元来、仏教の修行をした人しか悟れなかったが紀元前1世紀頃に「一般の多くの人を救おう」と大乘仏教が誕生し、釈迦如来だけでなく数多くの如来が考えられました。ほかに毘盧遮那如来、弥勒如来、多宝如来らがいます。

菩薩の代表は観音菩薩で、十一面であらゆる人々を見守る「十一面観音」、千の目で見つめ千の手で救う「千手観音」ほか、なんと33の姿があります。

そして優しく人々に寄り添う菩薩として釈迦に代わって人々を救う未来仏「弥勒菩薩」、六道をまわって苦しむ人々を救う「地藏菩薩」、ほか「文殊菩薩」や「普賢菩薩」らがいます。

明王の基本となるのは「不動明王」、「金剛夜叉明王」、ほかの五大明王です。

密教特有の尊像ですから「不動明王」は密教の最高神である「大日如来」の化身とされます。愛欲を悟りへと浄化させる「愛染明王」など、煩惱は悟りを妨げるものでなく、悟りの縁になるという密教の教えに則った像たちもいます。

天部には「帝釈天」、「梵天」、「吉祥天」「毘沙門天」、「金剛力士」、「阿修羅」ら、200以上の仏像がいます。とても紹介しきれませんが、長い歴史のなかで土着の神様も取り込みながら大きくなったのが今の仏教で、祈りの対象やシンボルとして多くの仏像ができました。ディズニーにも劣らない仏教ワールドのように僕は感じます。自分が親しみを感じる仏像への興味や参拝が、仏道を歩むきっかけとなればいいですね。